

## 台湾農村訪問調査報告（3）

— 2024年11月、南投県鹿谷郷秀峰村・鳳凰村・鹿谷村

祁建民・弁納才一・田中比呂志・曾獻緯

### はじめに

筆者らは2023年以降これまですでに2回、中央研究院台灣史研究所の協力と支援の下で台湾農村訪問聞き取り調査を実施している<sup>(1)</sup>。

今回（2024年11月28日（木）～12月3日（火）の5泊6日）は、前回まで中央研究院学術活動中心における宿泊をなかなか予約することができなかったことを踏まえて、約5ヶ月前の2024年6月末には郭婷玉（中央研究院台灣史研究所博士研究員）を通して我々日本側3人3部屋3泊分（11月28日、12月1日・2日）の宿泊予約を確定することができた。

今回、日本側からは弁納才一・祁建民・田中比呂志（年齢順）の3人が参加し、台湾側からは曾獻緯が参加して案内役を務めてくれたが、これまで2回の台湾農村訪問聞き取り調査に同行していただいてきた郭婷玉は同時期に台灣史研究所の用務があつて我々に同行することはできなかつた。よつて、今回の台湾農村訪問者は計4人だったが、前回までと同様に、8人乗りの運転手付き車輛を借り上げた。

祁建民と田中比呂志は所属大学（長崎県立大学と東京学芸大学）から支給されている研究経費から旅費（航空券代金、日当・宿泊費など）を捻出し、また、弁納の旅費及び台湾農村訪問聞き取り調査における車輛借り上げ代金と曾獻緯の日当・宿泊費については金沢大学から支給された研究助成金で手当でした<sup>(2)</sup>。

なお、今回、日本側から参加した3人の旅程は以下のとおりである<sup>(3)</sup>。

#### 11月

28日(木) : [弁納]出発(6:30)→金沢(かがやき 502、7:03)→東京(9:32)→羽田

[田中・弁納]羽田(NH853、12:40)→松山(15:50):両替→南港

[祁]福岡(JX841,19:10)→桃園(20:50) →南港 中央研究院学術活動中心 1泊

29日(金) : 起床(5:00)→出発(6:00)→南港(205 車次、7:40)→台中(8:40)

→秀峰村調査(①10:00～11:30、②14:00～16:30)

集集鐵道行旅 HOTEL JIJI+ 2泊

30 日(土) : 起床(6:00)→朝食(7:00~)→出発(9:00)

→鳳凰村調査(③10:00~11:30)→秀峰村調査(④14:00~16:30)

12月

1日(日) : 起床(6:00)→朝食(7:00~)→出発(8:30)→鹿谷村調査(⑤9:30~11:00)

→昼食→台中(1230 車次, 14:08)→南港(15:05) 中央研究院学術活動中心 2 泊

2日(月) : 文献資料調査

3日(火) : 文献資料調査(9:00~10:30)

[田中・弁納]南港(11:00)→(11:30)松山(NH852、13:30)→羽田(17:30)

[弁納]東京(はくたか 575 号 19:04)→金沢(22:16)

[祁]桃園(JX840, 14:45)→福岡(18:00)

今回の全日空(ANA)の羽田・松山(台北)便も往復ともに前回までと同様にほぼ満席で、乗客は日本人と台湾人がほぼ半数ずつという感じだった。

## 1. 概況

前回までの台湾農村訪問聞き取り調査と同様に、今後の台湾訪問と台湾農村訪問聞き取り調査の参考に資するために、日ごとの行動日誌と筆者(主に弁納才一)が見聞したことを記載しておくことにした。

### (1) 11月 28日(木)

早朝、金沢では雨が降っていたが、例年ほど寒くはなかった。途中、長野あたりからは晴れていた。東京駅に到着した後、山手線の浜松町駅でモノレールに乗り換えて eチケットの記載に従って羽田空港第1ターミナルで下車したが、駅員から全日空(ANA)系列の搭乗ターミナルではないと言われ、再びモノレールに乗車して羽田空港第2ターミナルへ移動した。当該ターミナルでチェック・インを済ませた後(当該チェックイン・カウンター前ですでにチェック・インを済ませていた田中比呂志と遭遇した)、搭乗ゲート前でメールを確認すると、ANAから搭乗ターミナルが第2ターミナルであるとの確認メールが届いていた。

羽田空港からの出発時刻が予定よりも30分ほど遅れたが、台北の松山空港にはほぼ定刻どおりに到着した。弁納と田中の2人が同空港内で両替をすると、提示したパスポートを見

た職員は日本語で対応してくれた。両替を終えた後、2人でタクシーに乗車して中央研究院学術活動中心へ向かった。タクシー料金は470圓だった。学術活動中心にチェック・インした際に、翌日のタクシー（高速鉄道の南港站まで）の予約をお願いしたところ、乗車距離が短いので前日の配車予約は不可能なので、翌朝のチェック・アウトの際に改めてタクシーを呼ぶように言われた。

同日の夜に到着する予定の祁建民を含む我々3人の部屋は全て4階で3部屋が隣り合っていた（今回の宿泊に際しては、弁納が郭婷玉を通じて3部屋の予約をお願いしていたので、3部屋全てが弁納の名前で予約登録されていた）。室内のシャワーの水圧はかなり弱かった（シャワーへの切り替えスイッチ部分に不具合があって若干漏水していたことも一因か）。室内には、ミニ冷蔵庫（上部の冷凍室には霜が付着）・湯沸かしポット・テレビ・HITACHI製の除湿機・電気スタンドが設置されており（ヘアドライヤーは無い）、ゴム製のサンダルと簡易なスリッパが置いてあった。学習作業用のテーブルは比較的広いが、木製の椅子は堅く、クッションなどは無かったので、長時間座って作業するのは困難である。

各階にはエレベーターの近くに飲用水（10度前後の冷水、25度前後の温水、100度近い熱湯）を提供する給水湯機が設置しており、その前には数人が座わることができるソファーが置いてあった。

夕食は、田中比呂志と弁納の2人で八方雲集という餃子（水餃子）・鍋貼（日本の焼き餃子に相当）のチェーン店で簡単に済ませた。夜は田中の部屋で今回の台湾農村調査の最終確認と打合せを行った。2日目以降、夕食後は3人が各自で農村調査のとりまとめや整理を行うことにした。

祁建民は、桃園国際飛行場に到着した後、MRTで台北站を経由して南港展覧館站まで移動して、タクシーで中央研究院まで移動した（夜間追加料金20圓と合わせて150圓）。中央研究院学術活動中心にチェック・インした時は11:30頃になっていたようである。祁建民からは日付が変わった頃に部屋に入れることができた旨のメールが届いていた。

## （2）11月29日(金)

5:00に起床し、6:00にチェック・アウトを済ませてフロントでタクシーを呼んでもらうと、10分ほどでタクシーが来てくれた。晴天だった。高速鉄道の南港站まではタクシーで約20分を要し、料金は140圓だった。南港站の乗車切符売り場の窓口にはほとんど人が並んでいなかったので、簡単に切符を購入することができた。乗車を予定していた7:40まで

1時間余りの待ち時間が生じた。車輛内は始発駅の南港站で乗車した際は非常に空いていたが、台北站からは多くの人が乗車してきた。

10:00から黃徳興宅で話を聞いていたが、11:30過ぎになると昼食を作るサービスをすることになっているという女性がやってきたので、聞き取りを終了することにした。黃徳興は、白内障で目が見づらくなっているということから、以上のようなサービスは身体障害者に対する行政サービスの一環なのかも知れない。

台湾系コンビニの駐車場に駐車して昼食をとった。昼食は鹿谷郷の中心部にある小さな麵屋で食べたが（米粉・板条・麵条などと野菜（甘蔗の葉）炒め・豆腐干・昆布）、全ての麵にはイカ（柔らかいが、うま味がないのは店先でイカを水に浸けていたからか）が入っていて非常に美味しかった。

昼食を食べ終わってから鹿谷郷の中心街を徒歩で散策し（詳細は後述）、車を駐車させていたコンビニに戻ってトイレを使った後、午後の聞き取り対象者の自宅へ向かった。

17:00頃、南投県集集鎮のホテルにチェック・インすると、室内には冷蔵庫・テレビ・コーヒーメーカー・湯沸かしポット・籐の椅子・テーブル・ヘアドライヤー・歯ブラシセット（祁建民の部屋には無かったという）はあったが、前回と同様に、スリッパ・ハンドタオル・フェイスタオル・学習作業用の椅子・電気スタンドはなかった。また、シャワーはお湯が出るまでかなり時間がかかった（前回と同様に、そのような注意書きが書いてある）。左右2つのレバーのうち、左側のレバーの上に高温注意のマーク（シール）があった（前回はそのようなマークは無かったので、どちら側のレバーを回すべきなのかわからなかった）。田中比呂志の部屋には簡易スリッパがあったが、やはり椅子は無かったので、持ってきてもらったという。なお、1階にはコインランドリーが4台設置してあった。

ホテルでは数人の東南アジア系（女性の服装・衣装からするとイスラム教徒）の宿泊客も見かけた。

18:00にホテルの1階に集合して、近くの小綺麗なレストランで夕飯を食べた。野菜炒めは油少なめの非常にあっさりとした味だったが、麻婆豆腐・ナス挽肉炒め・宮保鶏丁は辛い上に味が濃かった。台湾でこのような味付けの濃い料理を食べたのは初めてのことだった。また、ご飯はインディカ種米ではなかったが、やや固めに炊いてあった。

### （3）11月30日（土）

5:30頃に起床したが、外はまだ暗かった。外が明るくなると、ホテルの外で様々なトリ

の鳴く声が聞こえた。快晴だったが、長袖シャツ1枚ではやや寒いように感じた。7:10頃に朝食を食べに行くと、老人の団体旅行客が大勢で食べていて非常に賑やかだった。コーヒーメーカーの前でまごまごしていると、その中の老婦人が台湾語で何か話しかけてきた。だが、聞き取れずにいると、「米式咖啡」(アメリカン・コーヒー)のボタンを押してくれて、共通語(中国語)でどこから来たのかと聞かれたので、日本からと答えた。また、食べ始めると、服務員の女性がサービスだと言って茹で卵1個を小さな椀に入れて持ってきてくれた(翌日の朝食では茹で卵が「咸蛋」とともに提供されていたことから考えると、この日は老人の団体旅行客たちが茹で卵を食べ尽くしてしまっていたのであろう)。

張火森(鳳凰社区発展協会理事長・鳳凰山寺常務委員)は、お茶を出す前に茶葉から自分で造ったという42度の蒸留酒(「茶露」)を出してくれた(曾獻緯の母親も造ることができるという)。茶葉を食べる虫が吐き出した物が糖分を含んでいるために発酵させることができるのである。また、出されたお茶はかなり高級なものだった。聞き取りが終わった後で、田中比呂志は茶葉1箱(1,200圓)を購入していた。

昨日と同じ台湾系のコンビニの駐車場に車を駐車させて昼食をとった。ただし、本日の昼食は昨日とは異なる麺屋で各自が昨日とは異なる麺を食べた。また、昨日と異なる「小菜」として拌黃瓜と竹筍を食べた。

16:30頃にホテルに戻った時に、椅子を要求すると、直ぐに椅子を持ってきてくれた。ただ、部屋の中は掃除(ゴミ箱のゴミの回収)などがされておらず、昨日使用したバスタオルも交換されていなかった<sup>(4)</sup>(部屋には最初からバスタオルが2枚置いてあったので問題は無かった)。

17:30に1階のロビーに集合して夕食を食べに行った。八方雲集で餃子(韭、蝦、玉蜀黍)・枝豆・白菜の漬け物などを食べた。ホテルの近くにある廟では廟会の前夜祭が行われていたが、夕食を食べ終わって戻って来た頃には供物などを片付けていた。明日、神輿を担いで村の中を練り歩く予定だという。日系のコンビニで買い物をすると、店員が英語で韓国人かと尋ねてきたので、中国語で日本から来たと伝えて、逆に韓国人客が多いのかと聞くと、多いと答えていた。

#### (4) 12月1日(日)

6時前には外で銅鑼が鳴り響いていた。ホテルの近くの廟で銅鑼をたたいているのであろう。6:45頃に明るくなると、鳥が盛んに鳴き出した。本日も快晴である。7:00に朝食を

食べに行くと、数人の宿泊客が食事をしていた。7:30 過ぎに食事を終えて部屋に戻つてくると、外が騒がしくなった。廟会が始まって神輿が村内を練り歩き始めたのであろう。

日曜日は道路が混雑すると予想されていたので、8:30 にチェック・アウトしてホテルを出発したが、道路は渋滞することも無く、9:00 頃には王鑑雄氏宅に到着した。そのため、9:10 頃から 11:00 まで話しを聞くことができた。汪鑑雄は、長く編集関係の仕事をしていたことから、我々に各自 3 冊の本をくれた<sup>(5)</sup>。そして、室内外のあちらこちらで何度も我々との記念撮影を要求してきた。Facebook を利用しているというから、我々との集合写真を UP するつもりであろう。

汪鑑雄は、自ら自家用車を運転して、我々が昨日訪問した彬彬書院の事務室まで案内してくれた。現在、南投県彬彬社文化発展協会総幹事（名刺には前理事長と手書きされていた）を務めているので、事務室の鍵を所持しているのであろう。日中は直接日差しを浴びると少し暑い感じがした。

当初の予定では高速鉄道の台中站で昼食を食べようと考えていたが、時間的に余裕があったので、鹿谷村で昼食をとることになった。昼食は一昨日・昨日とは異なる麺屋で各自が麺や魯肉飯を食べた（「小菜」は竹筍と茎モヤシ炒め）。

借り上げた車輛が高速鉄道の台中站に到着した時に 3 日間の車輛借り上げ代金（1,800 圓）を運転手に支払ったが、運転手は会社の判子を押した領収書を持参してきていないと言うので、その場では領収書を受け取ることができなかつた。帰国から 1 週間余り経つた 12 月 11 日になってようやく領収書の写しが送られてきた（金沢大学事務局からは領収書の原紙の提出も要求された）。

曾獻緯を含めて我々 4 人は、台中站から当駅始発の高速鉄道の「自由席」に乗車した。というのも、我々 3 人の切符は曾獻緯が事前に指定席（「対号座」）を購入してくれていたが、乗車予定時刻よりかなり早く台中站に到着したので、予定よりも早く高速鉄道に乗車したという次第である。もっとも、停車する駅が多いので、所要時間はやや長くなるが、当駅が始発駅だったので、全く問題無く座ることができた。曾獻緯は台北站で下車し、明日の大学（東吳大学）の授業に備えると言っていた。我々 3 人は、高速鉄道の南港站からはタクシーに乗車して中央研究院学術活動中心へ移動し、16:00 前に到着した。

チェック・インする時、弁納才一の名前で 3 部屋が予約されていたので、弁納のパスポートを提示してサインするだけで、チェック・インが完了した。3 人の部屋は全て 5 階だったが、場所は分散していた。

部屋に入ると、冷房が入れられていて少し寒かった。台北市も台中市と同様に日中は暑かったのだろう。

18:00 に 5 階のエレベーター前に集合して夕食を食べるため外出した。祁建民の案内で、いつものように中央研究院正門脇の出入り口の左手ではなく、出入り口から直進して歩いて行ったところにある小さな店でワンタン麺などを食べた。「A 菜」(これまで我々 3 人が見たことのない青菜) の野菜炒めを食べた。台湾にはこれまで我々 3 人が見たことの無い知らない蔬菜が多い。中国大陆北方出身の祁建民も知らない蔬菜を多く耳にした。祁建民の印象からすると、日本は蔬菜の種類が少ないという。夕飯を食べ終わった後に、中央研究院の正門からほぼ直進して徒歩 10 分程度のところにある大型スーパーマーケット(祁建民がかつて中央研究院近代史研究所で文献資料調査を行い、学術活動中心に宿泊していた際に、近代史研究所の研究員に教えてもらったのだという) に立ち寄って商品などを見て回った。我々がそこを立ち去る際に、レジで精算を済ませた東南アジア系と思われる買い物客のグループもいた。

弁納が 11 月 28 日に宿泊した 4 階の部屋とは違って、12 月 1 日に宿泊した 5 階の部屋のシャワーは水圧に全く問題はなかった。また、日中・夜中ともにとても静かだった。宿泊者が少なかったせいか、両隣の部屋からも全く音が聞こえなかった。

#### (5) 12 月 2 日(月)

5:30 に起床し、今回の聞き取り内容を整理した。本日も快晴だった。弁納は、9:00 (日本時間 10:00) からオンラインで金沢大学国際学類の打合せに参加した。当初、打ち合わせは 1 時間ほどを予定していたが、実際には約 3 時間に及んだ。その後、再び、ホテルの室内で聞き取り内容の整理作業を行った。よって、当日、弁納は全く外出しなかった。

18:00 に 5 階のエレベーター前に集合して、行きつけの「八方雲集」で夕食をとった。途中、イスラム系と欧米系の 2 人組の女性客が入ってきた。そして、我々が食べ終わった頃には店内は満席となり、精算をしようとするとき、待ち客の列の最後尾に並ぶように言われた。持ち帰り客も周辺に待機していた。

日中、田中比呂志は昼食をとるために外に出て、ついでに翌朝に食べる物を昨日 3 人で行ったスーパーマーケットで購入した。また、祁建民は中央研究院近代史研究所の図書館で文献資料調査を行うとともに、中央研究院内にある郵便局で両替をしたが、パスポート情報の提示では両替ができず、入境証明書を提示してどうにか両替をすることができた。外出した

2人によれば、日中はかなり暖かかった（暑かった）ようだった。さすがに、夕方はかなり涼しかった。

#### （6）12月3日（火）

4:30に起床し、聞き取り内容を整理した。6:30頃には外が明るくなったが、本日は雲がやや多かった。7:00頃にトリが鳴き声が少し聞こえたが、外も非常に静かだった。

中央研究院学術活動中心から松山空港まではタクシーに乗車して約20分で到着した。タクシー料金は370円で、11月28日に松山空港から中央研究院学術活動中心までは470円だったから、100円もの差額があったことになる。

松山空港からはほぼ定刻に出発し、羽田空港（第3ターミナル）には定刻（17:30）より15分ほど早く到着したが、預け荷物が出てくるのが遅く、モノレールに乗車した時には18:10になっていた。浜松町駅でJR山の手線に乗り換えると、駅のプラットホームは人でごった返してして、車両内は超満員状態になっていた。19:03東京駅発の北陸新幹線はくたか号に乗車し、金沢駅には22:16に到着した。

## 2. 農村聞き取り調査記録

#### （1）11月29日（金）午前

聞き取り日時：2024年11月29日（金）10:00～11:45

聞き取り対象者：黄徳興（元秀峰儲蓄互助社理事長）

聞き取り場所：黄徳興宅（秀峰村）

聞き手：弁納才一・祁建民・田中比呂志・曾獻緯

通訳：曾獻緯・祁建民

記録・整理：弁納才一

黄徳興については、今回が初めての聞き取りだったので、話しを聞く前に我々の聞き取り調査の目的と我々の質問に対して言いたくないことは回答しなくても良いなどといった点を確認して了承を得た。

## 黄徳興の個人史

- ・1936年9月5日（子年）生まれで、88歳（数え年で89歳）になった。
- ・8歳から9歳までの約2年間、日本統治時代だったので、坪仔頂公学校（小学校）で日本語を学んだ。1年生の時の先生のことは忘れたが、2年生の時の先生は白髪の高齢の日本人（田中先生）で彼は台湾語を話すことができなかった。田中先生は生徒を殴ったりすることはなかった。夫婦2人で小学校の宿舎に住んでいた。田中先生の奥さんは和服を着ていて、宿舎に遊びに行った時には日本語の歌を教えてくれたが、どんな曲だったかは覚えていない。行進曲だったような気がする。その当時に学んだ日本語はほとんど覚えていないが、覚えているのは「カタカナ」、「あいうえお」などであるという。
- ・1945年、台湾が「光復」（日本植民地から解放）すると、国民党がやってきて小学校は秀峰村国民小学校（「国小」）と名称が変更され、3年間、国語（中国語・普通話）・ピンイン（ボボモフォ）を学んだ。その時の先生は、本村人の林宗漢で、自らもピンインを学びながら生徒に教えていた。
- ・家が貧しかったので、16歳からは鹿谷郷影雅村（現在、影雅社區）の私塾（黄伯熊先生の自宅）で自分で表紙（「台灣總督府」の印字があった）を付けて糸で綴じた教科書（『四書白文讀本』、田中比呂志が全体を写真撮影した）で学んだ（「割注」が付いている）。聞き取りの途中に、その教科書（「修身」（道徳・倫理）について教える内容）を見ながら声を出して読み出した。授業料として、年に100斤の米を換金してお金で納めた。これは、日本統治時代や国民学校の時の授業料に比べてかなり安かった。黄先生は50歳くらいの優しい人だった。その私塾には最も多い時（私が17歳の時）には37人の生徒が通っていた。
- ・私塾で学んでいた時、昼食は広興村に住んでいた外祖母の家で食べ、午後、再び私塾で学んだ。広興村と影雅村は近かった。
- ・子供の頃、「三字経」や「千字文」を学んだ（時期は不明。おそらく私塾で教科書となっていた）。
- ・1978年に現在住んでいる自宅を建てた。その年から茶葉（烏龍茶）を購入して乾燥させて製品として販売するようになった。
- ・2024年現在、月曜日から火曜日まで主に昼食を作ってもらう行政サービス（家の掃除なども含む）を受けている。

### 黄伯熊先生の一族

- ・黄先生の一族の中には、清代に「秀才」となった黄錫三<sup>(6)</sup>、日本植民地時代に台東県の県長になった黄伯鸞（日本の東洋大学に留学し、その後、中国大陆に渡って勉強した。公学校で漢文を教えていた）、「光復」後の国民党時代に高雄市の市長となった黄仲図（2・28事件後、台湾大学の「総務長」となった）などがいる。
- ・黄先生の息子は国営電力公司に勤務した。なお、黄先生の子供（息子）の詳細についてはまだ聞くべきことがあるように思われる。

### 黄徳興の家族史

- ・「光復」時、我が家には所有地は無かった。当時、両親は重労働である「施木馬」（木材を運ぶ）の仕事をしていた。
- ・父は、「光復」後の国民党によって実施された「三七五減租」以降、地主から「四分地」（0.4ヘクタールの土地）を買って、水稻二期作（6月と10月に収穫）と甘薯を間作（6月に植える）として栽培していた。その後、作付け作物は水稻から茶葉さらに檳榔へ代わり、最後は竹林となった。
- ・姉（竹山に嫁す）・妹（台中に嫁す）・弟の4人きょうだいである。
- ・妻（柯姓）は、初郷村靖山の出身である。
- ・3人の息子と3人の娘がいる。長男は「農協」（農会？）で働いていた。次男は台北の内政部「役政」（行政？）署で働いていた。三男は国防部で働いていた。皆、すでに退職している。長女は台中市環境保全局で働いていた。次女は台中市の企業で会計の仕事をしていた。三女は近隣村の瑞峰国中で教師をしていた。なお、黄徳興の家族史についてはまだ聞くべきことが多くあるように思われる。

（2）11月29日（金）午後

聞き取り日時：2024年11月29日（金）14:00～15:35

聞き取り対象者：林茂樹

聞き取り場所：林茂樹宅（秀峰村）

聞き手：弁納才一・祁建民・田中比呂志・曾獻緯

通訳：曾獻緯・祁建民

記録・整理：弁納才一

林茂樹については今回の聞き取りが3回目となるが、前回までは社区の理事長を務めているということから、前回までは田中比呂志らを中心として主に社区に関する話しを中心に戻ってきた<sup>(7)</sup>。

### 林茂樹の個人史

- ・8歳から秀峰国小で6年間学んだ。当時、私の家は貧しかったので、裸足で通学した。1学年には3クラスあり、1クラスは60人だった。児童数は女子よりも男子がやや多かった。先生（陳秋貴、1944年生まれ）は竹山村の出身で、台中師範学校を卒業し、小学校では国語・社会・数学などを教えていた。だが、林宗漢（林茂樹の「小叔」）先生は師範学校は出ていなかった。当時、秀峰国小には校長・教務主任・教職員などが20人余りいて、先生の半分は本村人で、もう半分は外地人だった。
- ・秀峰国小を卒業した後、台中の大甲高等農業学校綜合科に進学して5年間学んだ。綜合科では蔬菜栽培・水稻作などの他に数学・英語も勉強したが、畜産に関する勉強（授業）は少なかった。「軍訓課」の授業もあった。成績は普通だった。なお、同校には綜合科以外に機械科・木工科・園芸科があった。
- ・秀峰国小から大甲高等農業学校へは十数人が進学していた。秀峰国小の先生の中に大甲高等農業学校の先生と知り合いだった先生がいたので、同校へ進学するように紹介された。また、鹿谷郷出身者が多く入学していた。生徒数の男女比は2:1くらいで、男子が多かった。
- ・大甲高等農業学校を卒業した後、「姉夫」（清水村の人）が経営する豊原にあった「木材行」標林班で2年間働いた。月給は約1,000圓だった（当時の一般の労働者の月給は1,000圓以下だった）。樹木の伐採は、日本統治時代には樹木の上部だけが伐採されていたので（理由は不明）、「光復」後に下部の残された部分を伐採した。伐採した木材は「流籠」（ロープウェイ）で運んだ。後に、彬林溪標林班は倒産した。岡山機械学校で半年学んだ。
- ・21歳から3年間、嘉義空軍基地で爆撃機「右翼100」のメンテナンスの仕事をした（兵役？）。月給は70圓だったが、宿舎費・食費・煙草代などが支給された。軍幹部は大陸から来た国民党軍（「老兵」）だった。彼等は「眷村」（当時の軍幹部の家族が住む地域）に住んでいた。
- ・24歳、「堂姉夫」が経営する「砂石廠」（砂利は建設資材）で5年間働いた。月給は約3,000

圓で、宿舎に住んでいた。宿舎費・食費は無料だった。26歳で結婚してからは妻も同居した。当時、農業改良場からも就職の声がかかっていたが、月給が約1,500圓にすぎなかつたので、農業改良場へは行かなかつた。当時、米などを商人から購入したが、米1斤は十数圓だった。

- ・31歳、集集の林木局南投林区管理処（国営）に転職した。月給は1,600～1,700圓と少し少なくなってしまったが、健康保険や失業保険などの補償が充実していて安定していた。林木局は幹部も含めて外省人は少なかった。
- ・60歳で早期退職した（一般的に国家公務員は65歳が定年退職年齢）。退職金は400～500万圓だった。
- ・林木局を早期退職した後、従弟から植林の仕事を請け負って月給15,000圓を受け取った。その従弟の兄は銀行の総経理だったが、植林で国から20万圓を受け取っていた。このあたりの事情は不明な点が多いので、次回の聞き取りで確認する必要がある。
- ・友人の郭さんに雇傭されて、森林の除草（下草を刈り取る）作業などに従事する労働者を管理する仕事も兼業した。造林・森林管理の経験があったために、林木局を退職した後もあちこちから仕事の依頼があった。
- ・2024年現在も、13ヘクタールの森林の管理を任せられている。週1回、自ら自家用車を運転して森林（十数分で到着する）を巡回している。樹木（桃花心木、楠木、樟木など）は植樹後20年で伐採することができる。15:30過ぎに聞き取りを終了し、管理している森林を案内してもらった（詳細は後述）。

#### 林茂樹の家族史

- ・両親は子供の教育に対して熱心だった。
- ・妻は大甲の日南の出身で私と同じく大甲高等農業学校総合科を卒業している。私より3学年下で、卒業時に知り合い、18年（8年？）の交際を経て26歳の時に結婚した。

#### （3）11月30日（土）午前

聞き取り日時：2024年11月30日（土）10:00～11:45

聞き取り対象者：張火森（元国小教師、元鳳凰社區理事長）

聞き取り場所：張火森宅（鳳凰村）

聞き手：弁納才一・祁建民・田中比呂志・曾獻緯

通訳：曾獻緯・祁建民

記録・整理：弁納才一

張火森については、今回が第1回目の聞き取りだったので、話しを聞く前に我々の聞き取り調査の目的と我々の質問に対して言いたくないことは回答しなくても良いなどといった点を確認して了承を得た。

### 張火森の個人史

- ・1953年1月20日（辰年）に生まれ、71歳になった。
- ・6歳（数え年7歳）、鳳凰国小に入学し、6年間学んだ。小学校の時の先生（許憲川、2024年現在82～83歳、屏東県東港鎮出身、師範学校で3年間学ぶ）は、全ての科目を担当したが、指導はやや厳しかった。私が小学校を卒業してから2～3年後に故郷の屏東国小へ転勤となつたが、私が小学校を卒業した後もずっと連絡を取り合っている。昨年、許先生は自ら自家用車を運転してここに会いにやって来た。
- ・鳳凰国小を卒業した後は竹山初級中学で3年間学んだ。初級中学の数学の先生（賴文麟）は、竹山村の出身で、台北の台湾師範大学を卒業していた。賴先生の指導はかなり厳しく、特に礼儀作法にうるさかった。テストで満点を取らないと、棒で叩かれ、満点を取るまでテストを受けなければならなかつた。そのおかげで、後に台中師範専門学校の入学試験では数学は満点だった。一方、英語の先生（李逢材）の授業はいい加減だったので、英語は不得意だった。李先生は後に交通事故で頭を打つてしまい、すでに死去している。また、国語の先生（白尚忠）は外省人で、話を聞いてもよく理解できなかつた。さらに、博物科の先生（もと軍人）は福建省の出身だったが、閩南語が話せず、やはり話しが聞いてもよくわからなかつた。
- ・初級中学を卒業した後、母親の体調が悪かつたので、高級中学（高校）へは進学せず、台中の薬局で半年働いた後、師範学校に入学するために育民補習班で4ヶ月学んだ。授業料は1学期当たり4,000～5,000圓だった。
- ・台中師範専門学校で5年間学んだ。入学志願者約7,000人のうち合格者は200人だった。国家が学費・宿舎費・被服費（制服）を支給してくれた。1～4年生の時は一般科で学び、体操や軟式テニスが好きだったので、5年生の時は自ら選択して体育科で学んだ。
- ・台中師範専門学校在籍中に6週間、軍に入隊し、台中師範専門学校を卒業した後にさらに

1年10ヶ月、兵役の任務に就いた。花蓮と澎湖に半分ずつの期間いた。

- ・計2年の兵役を終えてから鳳凰国小の教師となり、国定教科書を使用して教えた。当時は、1人の教師が全ての科目を担当する「包班制」で、1クラス（児童50人）に平均1.2人の教師が配置されていたが、後に1クラスに平均1.5人の教師が配置されるようになった。2024年現在、鳳凰国小の児童数は減少し、1クラス（児童数27人）に2人の教師が配置されている。
- ・1974年当時の月給は1,800圓（加えて米11kg・食用油1kgも手当された？）で、また、「年終奨金」（ボーナス）は1.5ヶ月分だったが、一般の労働者の平均的賃金よりも低かった。
- ・鳳凰国小には永隆村と鳳凰村の児童が通っていた。鳳凰国小では儲蓄社を設けて児童に儲蓄を勧めた。1年間では小学校全体（全児童数は約600人）で十数万圓を貯蓄することができた。児童は家の農作業を手伝ってかなり多くの手間賃をもらっていた。というのは、当時は、茶葉1斤が100圓で、孟宗筍も高く売れたからである（これは、小学校の教師をやるよりも茶葉栽培や筍の収穫による収入が多かったという意味も含んでいるか）。
- ・小学校の教師をやりながら父親の茶園経営を手伝っていたが、退職後は茶園経営を継承した。

### 張火森の家族史

- ・先祖は福建省南靖の出身で、第12代の時に大陸から台湾にやってきて、祖父の代に本村で開拓・開墾した。私（張火森）は第21代である。なお、我が家には「族譜」がある。
- ・父（張清華）は、1924年（子年）生まれで、約2ヘクタールの茶園を経営していた。父の記憶に拠れば、1949年に4万圓を1万圓にするデノミが実施され、「新台幣」が発行された。また、日本統治時代は国民党時代に比べて「清明」（公明正大？）で、不正は厳しく罰せられたという。
- ・子供は息子が2人いる。長男は国中の教師で、その妻は公務員である。次男は軍人で少将を務めている。我が家は「軍公教警」（軍人・公務員・教師・警察）の職業に従事する者が多く、これらの職業従事者は年金が多いが、蔡英文総統の時に年金改革が実行された。例えば、小学校の教師の場合、退職前は毎月7.8万圓の給与とボーナスがあり、退職後は毎月8万圓の年金が支給されていたが、改革後の年金は毎月5.6万圓に減らされてしまった。そのために、かつて（蒋介石以来の国民党時代）の特権受益者は改革に反対する人も

多いが、私（張火森）は改革を支持しているという。

#### 茶園の経営

- ・昔は近隣村の村民同士で相互扶助的な共同作業（「放伴」）を行っていた（収穫量に応じて賃金を支払った）。2024年現在は、ベトナムやタイなどからやって来た労働者を雇傭するようになっている。
- ・2011年頃から農会などとは関係なく個人間（知人と）の契約で茶園を貸し出している（「外包」）。賃貸料は茶葉収穫量の2割である。

（4）11月30日（土）午後

聞き取り日時：2024年11月30日（土）14:00～16:30

聞き取り対象者：曾達坤

聞き取り場所：曾達坤宅（秀峰村）

聞き手：弁納才一・祁建民・田中比呂志・曾獻緯

通訳：曾獻緯・祁建民

記録・整理：弁納才一

曾達坤は張火森と同年生まれで、お互いによく知っているという。同年生まれとは言え、秀峰国小に通っていた曾達坤が鳳凰国小に通っていた張火森のことを知っているというのはどういう事情なのか、次回、是非聞いてみたい。なお、前回は曾達坤の個人史についておよそのことを聞いていたので、今回は主に曾達坤の家族史について聞こうと考えていたが、むしろ個人史や家族史を超えた社会経済的な状況について話しを聞くことができた。その内容は非常に興味深いものだった。

#### 曾達坤の個人史

- ・小さい頃は、家が貧しかったので、普段は「地瓜飯」（甘藷5分の4、米5分の1）を食べた。甘薯と筍は自分の家で栽培していた。筍干（メンマ）に油（ラード、豚肉の脂肪？）を入れて煮て調理して、おかずとして食べた。
- ・秀峰国小を卒業した後（14歳、1977年頃）、細い竹を切る、竹の皮を拾う、竹の葉を梱包する、農作業に従事するなど、いろいろな仕事に従事したので、少し収入が増え、白米

を食べることができるようになった。当時、竹の外皮はバナナを梱包する時のクッション材として使用された。地面に落ちている竹の外皮は自家の竹林以外でも自由に拾うことができた（2023年11月に初めて秀峰村を訪問した際に、案内役を務めてくれた曾獻緯から2023年現在でも竹の外皮は自由に拾うことができるという説明を受けたことを思い出した）。当時は、竹の外皮を1日拾って売ると、1斗（7kg）<sup>(8)</sup>の米を買うことができた。ただし、竹の外皮の表面には産毛のようなものがあり、それが飛散して皮膚に付着すると、非常に痒かったので、竹の外皮を拾う作業は辛かった。

- ・1975年（20歳代）に除隊（兵役の義務を終了？）した後、家で飼っていた豚を屠殺工と2人で屠殺場まで担いで運ぶ仕事を2年間やった。1匹につき20圓で売却した。

#### 曾達坤の家族史

- ・長兄（曾達明）は、7歳で秀峰国小に入学して6年間学んだ後、鹿谷郷の中心街にある鹿谷初級中学（初中）で3年間学んだ。当時、初中までは徒歩で約1時間かかったので、毎朝（未明）、私（曾達坤）が学校の近くまで一緒に付いて行った。家を出る時はまだ暗かったので、竹筒の中に家から徒歩で2～3分のところにあった雑貨店で買った灯油（詳細は以下の「秀峰村の雑貨店」を参照）を入れて上部に布を巻いて火を着けて松明のようにして灯りにした<sup>(9)</sup>。

#### 秀峰村の雑貨店

- ・本村内にはかつて10軒の雑貨商店があった（2024年現在は2軒）。雑貨商店では灯油の他に「魚干」（海魚の干物）・塩・醤油・醤（味噌）・「汽水」（炭酸水、当時は少し高価な飲み物だった）などを売っていた。「魚干」は雑貨商が集集鎮から台中まで買付を行っていた。「魚干」は1ヶ月に1回ほど食べ、春節には海魚の「鮮魚」を食べたが、川魚は少なかったので、あまり食べなかった。子供の頃、川魚を捕まえたこともあったが、川に入ると危ないので、大人たちからは川で魚捕りをしないように言われていた。

#### 兎の飼育

- ・兎は最も多い時で20匹飼育していた。兎の餌は主に「藤」（？）で、餌代がかからず、成長が早く、繁殖力も強い。

### 養豚

- ・私（曾達坤）がまだ小さい頃、我が家では鶏の他に 6 匹くらいの豚を飼っていた。父は、山道を徒歩で約 2 時間かけて竹山（母猪に子豚を産ませて売る農家がいた）で購入した子豚を担いで帰ってきて、家（「猪圈」）で飼育した。竹山には私（曾達坤）も父について行った。
- ・養豚を始める際には、「牲（？）猪槽下」（豚が病気にならないように祈る儀式）を行った。「猪槽」とは豚の餌を入れる石槽（飼い葉桶）のことである。
- ・春節前に「成猪」を屠殺業者に売って、ついでに豚油ももらい、「1 台斤」の豚肉を買った。豚を屠殺するには許可が必要で、屠殺税もかかるので、自分で豚を屠殺することはない。

### 屠殺業者

- ・かつて秀峰村・清水村・瑞田村の 3 ヶ村には 1 軒の屠殺業専業戸（どの村にあったかは不明）がいた。富裕戸だったが、1976 年頃に廃業した後、新たに南投県名聞郷東湖村に屠殺場ができた。

### 養鶏

- ・養鶏の主な目的は自家消費用の鶏肉と鶏卵を確保することだが、鶏 1 羽は 50 斤の米（籼米、インディカ種米）と交換することができた。

### 稻

- ・我が家の農地は 4 分地（0.4 ヘクタール）しかなかったので、米（蓬萊米、ジャポニカ種米）を収穫した後にはそのほとんどを借金の返済分として上納したこともあったので、鶏を米（籼米）と交換して自家消費用にあてる必要があった。籼米 1 斗（7 kg）が 28 圓だったのに対して蓬萊米 1 斗は 33～35 圓で 5～7 圓の較差があった。かつて 9 人家族で 1 週間で米 1 斗を消費した。
- ・「矮種籼稻」は、背丈が低いので暴風雨に強く、また、単位面積当たりの生産量も多かつたので、価格も安かった。

### 農作業の互助

・昔（いつ頃かは不明）は、12～13戸の農家で農作業をお互いに助け合って行っていた（1戸当たり労働力1人を供出）。例えば、稲の収穫作業では手伝ってくれた人には「白米飯」・「咸飯」（漬物（？）、筍干（？）と少しばかりの挽肉）と兎肉（夜は「汽水」も）を提供した。1分地当たりの収穫には労働力2人が必要で、その収穫物を運ぶのにも労働力2人が必要だった。よって、4分地では16人の労働力が必要となるが、最後は収穫作業従事者2人がそのまま運ぶ作業も行うので、13人くらいで十分だった。また、田植え・除草（雑草を抜くのではなく、泥の中に埋めるので重労働だった）・竹林の整理では昼食のみが提供された。

#### （5）12月1日（日）午前

聞き取り日時：2024年12月1日（日）9:30～11:00

聞き取り対象者：汪鑑雄（元正中書局総經理、元鹿谷社区総幹事）

聞き取り場所：汪鑑雄宅（鹿谷村）

聞き手：弁納才一・祁建民・田中比呂志

通訳：曾獻緯・祁建民

記録・整理：弁納才一

汪鑑雄氏宅に入ると、リビングルームには多くの本や雑誌が山積みにされていた。汪鑑雄については、今回が第1回目の聞き取りだったので、話を聞く前に我々の聞き取り調査の目的と我々の質問に対して言いたくないことは回答しなくても良いなどといった点を確認して了承を得た。

#### 汪鑑雄の個人史

- ・1945年（酉年）3月7日に鳳凰村で生まれた。5歳の時（1950年）、鹿谷村に転居してきた。なお、現在の自宅は1988年に4階建ての「天井」<sup>(10)</sup>（天井に明かり取り窓のある吹きぬけ）に改築した。
- ・7歳から鹿谷国小で6年間学んだ後、竹山初中で3年間学んだ。竹山初中へは員林客運（彰化県員林と関係があるか）の路線バス（1日4便、学生票・月票を購入、女性の車掌付き）で25分くらいかけて通学していたが、車酔いをすることがあったので、竹山の「伯父」（父の兄、父より6歳年上、竹山延平国小の校長）の家に寄宿して「伯父」の息子（私

より 1 歳年上) の自転車に乗せてもらって通った。「伯父」の家から竹山初中までは約 3 km だった。当時、学校までの道路(砂糖黍を運ぶ牛車が多く走っていた)には砂利が敷かれていた。昼食は弁当を持参した。

- ・(何年か?) 台中市立一中(「高中」すなわち高校)に進学した(後に、「高中」は市立から省立へ変更された)。当時、学校には学生宿舎がなかったので、朝晩の賄い付きの民間の家に下宿し(「房租・房費」を支払った)、昼は学校の食堂で食べた。高校に入学した当初は、背が低かったので、校内で整列した際に「初中」(中学生)の列に並ぶように言われたことがあった。なお、「中学」(中学校・高校)では制服・制帽があった。
- ・高校卒業後、中国文化大学新聞系で 4 年間学んだ。その後、台湾政治大学新聞研究所修士課程で 3 年間学び、在学中に中央通訊社に就職し、「彗済社」(仏教関係の雑誌社)で 1 年間勤務した。その 7~8 年後に国民党中央党部文化工作会(後の行政院新聞局)で勤務した。なお、台湾政治大学の同窓生(吳豊山)は『自立晚報』(1947 年 10 月 10 日創刊)の総經理になった。
- ・国民党中央党部文化工作会で勤務した後、正中書局(国民党系の出版社)へ転職して 12 年間働き、副總經理まで務めたが、正中書局が民間に売却(民営化)されたので、定年退職年齢の 60 歳前の 2003 年(58 歳)に退職した。退職後は、彬彬社區の文化事業に無償で従事している。すなわち、南投県彬彬社區文化發展協会総幹事を務めている。
- ・2024 年現在、台北市と鹿谷村の 2ヶ所の自宅をほぼ半月ごとに行き来している。

### 汪鑑雄の家族史

- ・父の両親(祖父母)は、父が 12~13 歳の時に亡くなった。
- ・父(汪清潭、1921 年・酉年生まれ)は、4男4女の 8 人きょうだいだった。台中東勢農林学校の学費を「伯父」に出してもらって、卒業後は竹山糖廠で働いたが、1944 年に鹿谷産業組合(当初は日本人職員もいたが、後に台湾人職員に取って代わられた)で働き始め、鳳凰村から徒歩で約 1 時間かけて通勤していた。冬(春節前)、通勤時に自家で作っていた筍を担いで鹿谷で売っていた。後に、南投県「模範父親」(1 県につき 1 人選出)として表彰された(室内の壁に表彰状が掛けてあった)。
- ・母は、8 人きょうだいの 2 番目で、竹山公学校高等科(後の初級中学)を卒業した。父母は、ともに日本植民地時代に公教育を受けていたので、日本語を話すことができた。
- ・妻(谷蘭瀅)の父(谷策)は北京人で、1948 年に北京から台湾にやってきた。妻は台湾

で生まれ、中央通訊社（台北市松江区。当時は中国国民党の機関だったが、後に民間企業となった）で編輯の仕事をしていて、同社で国内部記者として働いていた私（汪鑑雄）と知り合った。

- ・「外公」（母の父、黃文裕）は、「光復」後に鹿谷郷の郷長となった。「外公」には 17 人の子供がいたが、末っ子が 2 歳で死去し、その他の 16 人の子供には台湾大学教授・裁判所の所長・学校の校長などがいた。例えば、母の 7 番目のきょうだいは台湾大学法律系研究所（修士課程）を修了し、母の 1 番上の兄は台湾大学経済学系を卒業した後、台湾大学の教授となった。
- ・教育を重視していた「外公」の影響を受けて、私たち兄弟姉妹 6 人はみな大学を卒業している。
- ・3 人の娘がいる。長女は、交通事故で働くことができなくなり、台北市の自宅に住んでいる（未婚）。次女は、アメリカの石油会社で働いており、3 人の子供（夫はアメリカ人）とともにアメリカに住んでいる（夫や子供たちの写真を見せてくれた）。三女は、新竹科学技術研究院で働いている。

汪鑑雄は普通話を話すことができたので、曾獻緯の通訳を介さず、祁建民が直接聞き取りを行った。汪鑑雄からは何度か蔣經国（元總統）の名前が出てきたが、詳しい内容はわからなかった。

### 3. 参観地

#### （1）11月29日（金）

昼食後、近くにある鹿谷郷農会・鹿谷郷農会信用部・鹿谷郷民代表会・鹿谷郷戸政事務所・鹿谷郷公所・鹿谷郷蔬果生産合作社・鹿谷郷衛生所・影雅社区活動中心・影雅社区發展協會（影雅村辦公處）・鹿谷郷清水社区發展協會照顧關懷拠点（老人に対するデイ・サービスを提供する施設）<sup>(11)</sup>・祝生廟<sup>(12)</sup>・土地公廟（その傍らに新旧 2 つの徳遍山陬石碑あり）・彬彬書院<sup>(13)</sup>などを参観した。

鹿谷郷清水社区發展協會照顧關懷拠点には竹山秀傳医院巡回医療がやって来るとの張り紙（「診察曜日：金曜日、診察時間：午前 9 時～12 時」「本医療服務、提供各式看診（除牙

医・眼科看診服務外)・拿藥及各式諮詢服務, 免掛號費, 請鄉親多加利用!」)が貼られており、中を覗いたりしていると、責任者と思われる中高年の女性が中を自由に参觀してよいと言つて中に入れて案内してくれた。

彬彬書院の入り口には奨学金申請を受け付けている旨の掲示があり、また、同院内の側壁(「龍鳳榜」)には有名大学および大学院への合格者と合格祈願者の札がかけてあった。

その後、八百屋を覗いて台湾独自の野菜などを見ていると、我々が日本語を話していたせいか、日本語で「日本人ですか」と声をかけてくる中高年男性がいた。また、近くに駐車していた小型トラックの荷台には出荷用の段ボール箱に詰められた蔬菜(敏豆・醜豆・櫛瓜(青・黄))が積載してあった。

午後の聞き取りを1時間30分余りで終了した後、聞き取り対象者の林茂樹による案内で彼が管理業務を任せられている森林を参觀した(これまで見たことのない樹木なども植林されていた)。現在、庭木の植樹を含めて造営中の管理事務所の責任者(劉氏)が出迎えてくれた(平屋建ての管理事務所の中には大型冷蔵庫・ダイキン製業務用大型エアコン・ベッド2つなどが設置されるようである)。管理を任せられている森林を案内してくれた林茂樹によれば、除草(樹木の下草処理)作業のために、多くのベトナム人や原住民を雇傭したという。

その後、60年に1度の祭典が執り行われることになっている土地廟(曾獻緯によれば「受龍宮」、垂れ幕には「福德宮」とあり)を参觀した。本祭(数多くの豚などの供物が並べられるようであるが、祭壇にはすでにイミテーションの豚が陳列されていた)は明後日の12月1日(日)に催される予定だというが、すでに数名の道師(外来者)が寺廟内で祈祷を行っており、また、寺廟の後方には舞台が設置されて衣裳を身に纏った女性が歌を歌っており、準備が着実に進められていた。数多くの供物が詰められている段ボール箱には日本語の表記も見えた。寺廟の前の道路は片側が封鎖され、供物を載せる台を設置する場所が確保されていた。

## (2)11月30日(土)

9:00にホテルを出発し、午前中の聞き取り対象者(張火森)が居住している鳳凰村に行く途中で、曾獻緯の案内によって南投県凍頂茶区優質伝統烏龍茶展售門市永隆茶芸站の看板がある地点から麒麟潭<sup>(14)</sup>を眺めた。鹿谷郷の多くの山林が台湾大学の所有地になっているという。

昼食後、鳳凰山寺<sup>(15)</sup>(寺廟のすぐ脇には「鳳凰社區長寿俱樂部、鳳凰山寺管理委員会」の

看板あり)を参観した。また、同寺廟の境内には「鹿谷西医巡回医療(服務時間:8:30-11:30)」の張り紙があり、巡回場所として鳳凰山寺(月曜日)・和雅村活動中心(火曜日)・竹林村果菜市場(水曜日)・永隆村開山廟(木曜日)・清水村活動中心(金曜日)が記載されている。

鳳凰山寺の境内を参観していると、鳳凰山茶(凍頂茶)の「品茶師」の林義祥が我々に話しかけてきて、日本から来たとわかると、当該地が鳳凰山茶の生産の中心地で、葡萄の生産でも有名であると説明してくれた。そして、別れ際に我々3人に「鳳凰山茶(原香)」のサンプル品を1包ずつくれた。

さらに、鹿谷郷農会茶業中心の中にある茶業文化館を参観した。2階に鹿谷郷の茶業(関連する道具や機器を含む)の歴史に関する展示があった。1階では数多くの物産を販売していたが、台東県池上郷農村の「池上米」の「有機糙米」と表示された袋詰めの米は1.5公斤すなわち1.5kgだった。販売している商品は全て農産物加工品で、パッケージには日本語も記されている。

### おわりに

曾達坤と林茂樹の話しあは、前回までの聞き取り内容からすると、予想外の内容で、非常に興味深かった。すなわち、これまで個人史や家族史について聞いてきた曾達坤からは農村の社会経済的状況とりわけ農作業において相互扶助的な関係があったことを聞くことができた。また、社区の理事長を務めていた林茂樹からは長年にわたって従事してきた造林・森林管理に関連する仕事について聞くことができた。

今回、曾獻緯の紹介によって新たに3名の方に話を聞くことができた。聞き取り中によくわからないことがしばしば出てきたが、その度に地元の事情に精通している曾獻緯が説明をしてくれた。彼の支援と協力無しには順調に農村聞き取り調査を実施することは到底不可能である。改めて謝意を表したい。

今回、曾獻緯からは3篇の研究論文の抜き刷りをいただいた<sup>(16)</sup>。また、来年は東吳大学において我々日本側との共同のワークショップを開催したい旨の提案があった。

今回の聞き取り終了後に、2025年2月19日から21日まで台湾農村調査を実施したいという希望を曾獻緯に伝え、了承を得ることができた。

## 注

- (1)弁納才一・曾獻緯・郭婷玉「台灣農村訪問調査報告（1）——2023年11月、南投県鹿谷郷秀峰村」（霞山会『中国研究論叢』第24号、2025年2月）。弁納才一・曾獻緯・郭婷玉「台灣農村訪問調査報告（2）——2024年3月、南投県鹿谷郷秀峰村」（霞山会『中国研究論叢』第24号、2025年2月）。また、弁納才一訳「潘美慈・曾獻緯「農村変遷的堅韌女性 蕭美季女士訪問記録」」（早稲田大学東洋史懇話会『史滴』第46号、2025年3月）、前野清太郎「台灣農村における廟・集落関係——2023年11月、台灣中部南投県鹿谷郷における調査から」（『中国研究論叢』第24号、2025年2月）も合わせて参照されたい。
- (2)弁納才一、金沢大学、令和6(2024)年度「戦略的研究推進プログラム：科研費採択支援（大型中型種目再チャレンジ支援）」。これは、基盤研究(A)(一般)、令和6(2024)年度—令和10(2028)年度、「農村社会環境から考える中国型資本主義の特質と近現代華人農村社会経済史像の構築」（研究代表者：弁納才一）が不採択となったが、「A」評価だったことから研究助成金が支給されたものである。
- (3)11月28日(木)の弁納の金沢から東京・羽田への移動手段に関しては、二転三転して若干混乱した。台灣訪問に関しては、これまで小松・桃園直行便を利用してきたが、台北への到着時刻が遅すぎたり、台北からの出発時刻が早すぎたりして極めて不便だったことから、今回は当初から東京経由で羽田・松山便を利用する利用することにした。金沢駅を7:03に出発する新幹線に乗車して東京へ移動することにしていたが、旅行代理店から勧められて金沢駅の出発時刻を約1時間遅らせることができる小松・羽田便を利用することになった。ところが、暫くして11月からの国内便の発着時刻が変更となったことから、羽田空港における飛行機の乗り継ぎに関する（2時間以上の乗り継ぎ時間を確保する）規定により、結局、小松空港を約2時間前の便に変更せざるをえない（当初の新幹線金沢駅出発予定時刻より約1時間早くなる）ことが判明したため、当初の新幹線を利用する旅程に落ち着いた。なお、今回の台灣訪問に先立って2024年9月上旬に前野清太郎が台灣農村を訪問していた。
- (4)室内のテーブルの上に置いてある注意事項が記載されているカードには、環境保全と資源節約のために枕カバー・布団・シーツは2日間ごとに交換する（もし交換の必要があれば、注意書き を記載しているカードを枕元に置いてください）と記載してあった。
- (5)汪鑑雄主編『開山佑民——慚愧祖師的啓示』(南投県鹿谷郷鹿谷社区発展協会、2009年)。

黃允哲・楊維仁・詹培凱主編（汪鑑雄發行）『鹿谷黃錫三秀才詩集』（社団法人南投県彬彬社文化發展協会、2018年）。汪鑑雄著『鳳鹿飛煙：雪泥鴻爪』（南投县政府文化局出版、2021年）。

(6)黄錫三は、彬彬書院の展示パネルで大きく取り上げられており、鹿谷郷で最も著名な人物となっている。

(7)前掲「台灣農村訪問調査報告（2）——2024年3月、南投県鹿谷郷秀峰村」145～146頁。

(8)日本のスーパーマーケットなどでは袋詰めの米は2kg・5kg・10kgのものを売るのが一般的であり、台湾のコンビニで7kgの袋詰めの米を売っていたのを見て違和感を感じたが、台湾では米の重量の一般的な単位が「斗」（「公斤」ではない）であることから、1斗（7kg）で売るのが一般的になっているのだろう。

(9)前掲、弁納才一訳「潘美慈・曾獻緯「農村変遷的堅韌女性 蕭美季女士訪問記録」」を参考されたい。

(10)拙稿「華中農村訪問調査報告（3）——2019年10月、湖南省の農村」（『中国研究論叢』第20号、2020年12月）97頁。同稿は、弁納才一・田中比呂志・古泉達矢編『華東・華中農村訪問調査報告書（2008年～2019年）』（汲古書院、2023年）に所収されている。なお、2019年10月に湖南省農村調査を実施した際に通訳を務めてくれた劉学裕（華中師範大学外国語学院）によれば、出身地の江西省の農村部（祖父母の居住地か？）にもかつて邸宅に「天井」があったという。

(11)レセプション・ルームのような部屋の壁には、「電腦教學」、「手作DIY」、「活力帶動跳」、「衛教視訊」、「延緩失能」、「音樂律動」、「歡唱娛樂」、「潛能藝術」、「書法練習」、「分康車」、「美術療育」などのカリキュラム一覧表（2024年11月分）が掲示してあった。

(12)鹿谷祝生廟管理委員会印製「鹿谷祝生廟的歷史文化——發揚慚愧祖師度人謙悲自省的精神」（2013（民国102）年3月）。

(13)鹿谷郷公所・南投県彬彬社文化發展協会印製「鹿谷　彬彬書院（新寮老街）　彬彬大道——景點介紹」。

(14)同上。かつては永隆大水堀と呼んでいた（後掲「鹿谷　鳳凰山寺簡介」14頁に写真あり）。

(15)南投県鹿谷郷鳳凰山寺管理委員会編印「鹿谷　鳳凰山寺簡介」。

(16)曾獻緯「台灣軍公教食米配給制度的形成及其運作」（『国史館館刊』第70期、2021年12

月)・同「競賽与產業：以南投縣鹿谷鄉農會「凍頂烏龍茶」比賽為例」(中央研究院台灣史研究所『台灣史研究』第31卷第2期、2024年6月)・同「環境与人為互動——台灣夏季蔬菜的栽培創新與消費變遷（1950-1980s）」(『台灣風物』第74卷第3期、2024年9月)。

使用 OS 名：Windows11

使用ソフト名・Word

キー・ワード：台灣農村、個人史、家族史、社會經濟

アブストラクト：

本稿は、これまで長年にわたって中国大陆農村で訪問聞き取り調査を実施してきた祁建民・弁納才一・田中比呂志が曾献緯の全面的な協力によって台湾中部農村において聞き取り調査を実施した成果をまとめたものである。台湾農村における今回の調査は、2024年11月に南投縣鹿谷鄉秀峰村・鳳凰村・鹿谷村で実施され、台湾農村訪問調査としては2023年11月と2024年3月に続く3回目となった。これまでの個人史や家族史に加えて、農村における社会経済状況などについても話を聞くことができた。